

13 . やさしい少年 (ミンダナオ)

昔々、貧しい農夫と彼の妻が、海のそばの小さな村にいました。彼らにはバヤバスという名の若い息子がいて、彼らの農作業を助け、三頭のカラバオ(野牛)の世話をしていました。

毎朝、バヤバスは緑の野原へ三等のカラバオを連れて行っていました。そこでは新鮮な果汁がしたたる草を食べることができました。それから、彼は三頭を輝く川のそばに連れて来ました。ここでは、水も飲めるし、水浴びもできます。水を飲んだり、水浴びをしたあと、カラバオは木陰に横たわって休みました。毎日、カラバオが休んでいる間、バヤバスは野原のたくさんの木に登って、そして、取れる果物を探し、食べていました。彼は、ランゾネスの木や、ドリアンの木、ポメロの木などに登って、彼の好きな果物を食べました。しかし、特別な木があって、バヤバスはいつもそれを避けていました。なぜなら、その実を、みんなは、毒がある、と思っていたからです。

ある日、バヤバスは、毒があって禁じられている果物をつけた木の下で休んでいました。枝を見上げて、周りを見ると、緑のおいしいそうな果物が、低くぶら下がり、手を伸ばさなくても十分に触れるほどでした。「もったいないなあ。」彼は独り言を言いました。「神様、もしこれらの果物が食べられさえしたら、たいへんな栄養を、私や家族や村人たちに与えてくれるのに。」彼が言い終わるとすぐ、雷のバリバリという音が空を引き裂き、明るい光の線が雲から出て、バヤバスの頭から数インチの地面に落ちて、彼と三頭のカラバオをびっくりさせました。

バヤバスが足でジャンプして、きらめく光が通り、煙が起こると、彼は美しい女性が彼の前に立っていて、流れる白い服を着て、彼女の頭には、ピカピカ光る冠があり、手には輝く杖を持っていました。彼女の体全体には、柔らかな白い光が流れていました。「怖がらないで、バヤバス！」とその美しい女性は言いました。怖がっているバヤバスを見て、「私は森の女神ディワタ。私はここフィリピンの神話と伝説

で、あなたの願いを叶えてあげます。しかし、私が叶える前に、私のために、特別な仕事を終わらせてもらわなきゃならないわ。」

びっくりしたバヤバスは、何をさせようとしているのか、ディワタに聞きました。「昔々」と、女神は言って続けました。「この木の実は食べられたんです。しかし、人間の貪欲と悪意のため、神様によって、この木に呪いがかけられ、その実は有毒になったのです。この呪いを解いて、あなたの願いを叶えるためには、黒い犬の血を木の幹に撒き散らさなければなりません。この仕事には、24時間の時間があります。」驚いたバヤバスが、答えるチャンスを見つける前に、輝く女神は、突然消えました。

しばらくして、バヤバスは、静かに木の下に座り、女神が彼に言ったことを熟慮していました。勿論彼は、美しいディワタに従いたかったのです。しかし、バヤバスは、この地方の人は誰も黒い犬を持っていないことを知っていました。彼自身はやせた黒い子犬を持っていました。しかし、その子犬を彼はたいへん愛していて、それを殺すことはできなかったのです。

その夜、家に帰って、バヤバスは野原で起こったこと、美しい女神が言ったことを考えないではいられませんでした。彼のやせた子犬が、彼の膝に飛び乗って、彼の顔を舐めはじめた時、バヤバスは、この愛する子犬の命を犠牲にすることなんか、彼にはできないと思いました。しかし、一方、バヤバスは、何百万もの世界の人々が、もしこの毒の実が食べられる実になれば、ためになることも考えました。その夜、彼は重大な決断をしたのです。

次の朝、バヤバスは目に涙をためて、やせた黒い子犬を連れて、野原へ三頭のカラバオと一緒に行きました。毒を持った木の場所に着くと、彼の子犬に口づけして、それを木の幹の横に置きました。バヤバスはベルトから、鋭いナイフを取り出しました。それは、密かに父から借りたもので、やせた子犬の頭の上に持ち、切る用意ができました。バヤバスは泣いて、空中に高く、その鋭いナ

イフを持ち上げました。

しかし、バヤバスが彼の子犬の頸にナイフを振り下ろそうとした時、目がくらむような光が輝いて、森の女神は、彼の前に、また現れました。「やめなさい、バヤバス。」彼女は叫びました。びっくりしたバヤバスは、鋭いナイフを地面に落としました。「あなたの愛する子犬の命を、犠牲にする必要はありません。あなたには、思いやりがあり、私欲がなく、愛するものを失うこともできることを示してくれました。だから、これから人間は利益を得るでしょう。」女神は、彼女の輝く杖をあげて、魔法の呪文を唱えました。「私の命じる自然の力によって、これらの実は、地上全体にわたって、食べられるものになれ。」

美しい女神は、丸い緑の実を木からもぎ取って、バヤバスに渡して言いました。「今からこの実は、あなたの名前を持つこととなります。あなたの思いやりと、親切さと、私欲のなさの名誉のために。」慎重に、バヤバスはその実を口に入れ、そして噛みました。それはおいしく、もはや毒はありませんでした。彼はたいへん幸せでした。しかし、森の美しいディワタに霊を言う前に、彼女の輝く姿は、微かに光って、突然消えてしまいました。

大喜びのバヤバスは、ポケットから袋を出して、運べるだけのたくさんの、その緑の実を詰めました。彼は、新しい実と、彼の子犬と、三匹のカラバオと共に、村科での道を走って帰りました。

最初、バヤバスの家族や友人は、その丸い緑の実に、もう毒がない、ということ信じられず、拒否しました。それでは、と彼らを納得させるため、バヤバスは、彼らのびっくりしている目の前で、その実を食べました。バヤバスが、その実から、何の悪影響も受けないのを見て、彼の家族と他の村人も喜んで、その実を自分たちも待ちきれず食べました。

森の女神が約束したように、その丸い緑の実は、バヤバスとして今も知られています。小さな少年の、他者のために犠牲を惜しまないで行なった意志の名誉のために。

フィリピンの神話と伝説 13 . やさしい少年

(バヤバスは、グアバの別称です。)